NO. 42
March '07

KOIWS newsletter

神戸女学院大学
女性学
インスティチュート

公開講座
「ダイエットの落とし穴」を担当して

生　野　照　子

昨年11月から12月にかけて、西宮市大学交流センターで心理・行動科学科主催の公開講演が行われた。4回シリーズであったが、そのうちの1回に「ダイエット」をテーマとしてとりあげた。その理由は、現代の「やせ礼賛風潮」の中にあって子どもに至るまでやせ願望を強めているからである。たとえば筆者らの調査（2000～2003. 調査対象：小～大学生計1,250名）では、「体重が気になる」とした小学生は女子73%・男子40%で、「やせたい」とした小学生は女子59%・男子25%。そして、女子全体の80%・男子全体の55%が、「やせているほうが格好良い」と考え、女子58%・男子25%が「体重が増えると自分が嫌になる」と答えていた。つまり、体重や体型が子どもたちの自己評価にまで影響を及ぼしているという結果がみられた。また、中学1年女子の調査（2003）では、約80%が現在の体重に不満を感じており、「体重は44.5kg, BMIは17.8」という「やせすぎ」を理想としている結果であった。彼女たちの1/4は「現在ダイエットしている」と答え、63%が「今後ダイエットする」と答えていた。

このように、やせ志向が異常にエスカレートしているにもかかわらず、やせすぎの弊害はあまり知られていない。たとえば若い女性が無謀なダイエットを行ってBMIが17.5kg/㎡以下になったり、あるいは標準体重の85%以下に体重減少すると、「病的なやせ」と診断されて摂食障害の範疇にはいることになる。そうなると栄養不良による合併症や後遺症を起こしたり、精神障害に長期間苦しんだりする可能性がでてくることになる。しかし、こうした知識をもっている女性はそんなに多くなく、大学の授業などで病状を教えるとかなりの学生が声をあげて驚くありさまである。

摂食障害は、日本での発症数は英米と同様に多いとされ、若い女性100人のうち20～5人くらいが発症していると考えられている。拒食症よりも過食症が増えているので、体重や外見から判断できず、早期発見が難しい。しかも日本での医療対策はきわめて遅れており、専門的な治療機関や専門家数も絶対的に不足している。そのため、発症すれば治療機関探しに時間がかかり、早期治療を逸しやすいという状況が生じている。10～15年と病気が続くと、社会不適応や対人関係困難が強くなり、精神面が悪化して（下記参考）自傷や自殺企図を繰り返すなど心身両面の苦境に追い込まれやすくなる。

従来から「女子大学はやせの温床」といわれ、予防活動が必要であると指摘されているが、日本で本格的に実施しているところは皆無に近い。唯一、本校では「ED会」という学生による自主的な予防活動を立ち上げており、モデルケースとして成果が注目されている。また、高校生に出張授業を行って「やせの弊害」を伝えたり、「本当の美しさ、本当の自分らしさとは」を考えるための討論を行ったりしている。しかし何よりも家庭で予防・早期発見することが大事であり、本講演ではダイエットから摂食障害に至る過程や症状などについて説明した。受講者の中には「発症者の家族」という人も数名おられて、熱心にメモをとったり質問したりされていた。今後も、地域サービスの一環として「摂食障害」の啓発が必要だと痛感した次第であった。

参考　低栄養が精神に及ぼす影響：
過活動、気分易変性、抑うつ、焦燥感、強迫性、固執性、集中力・記憶力・決断力の低下、意欲や自発性の低下、親密さの障害、衝動性制御の低下、睡眠障害　など

（人間科学部心理・行動科学科教授：心身医学）

学外講演会で講演を行なって

【第1回：2006年10月7日】……松縄順子
●「異文化コミュニケーションに於ける英語の役割」

10月7日、女性学インスティチュート学外講演会を担当して、「異文化コミュニケーションに於ける英語の役割」と題して、講演を行った。

歴史的に日本の異文化コミュンケーションはどの様に発展してきたのか、特に欧米からの異文化の受容はどうであったかを考察し、担い手となる英語の役割に

ついて論じた。

現代では英語が世界語として定着している。英語は1．言語として簡単。2．表現が率直で明快、明確。3．正確に簡潔に表現でき、国際ビジネスを行うのに最適。4．文法が比較的他のヨーロッパ言語に比べて簡単で例外が少ない。5．歴史上、常に国際政治でリーダーシップを握る大国の母語が世界語になる。今日アメリカ合衆国の母語である。6．世界中で第一外国語として約10億人が英語を学習。7．敏速な世界の動きに伴うＩＴなどの国際コミュニケーションの発達に必要な言語である、等が挙げられる。我国はアジアで唯一母語で近代化、工業化に成功して、先進国の仲間入りをした。教育が日本語で受けられ、異文化理解のために殆どの分野が翻訳されている世界一の翻訳大国である。異文化コミュニケーションの手段である英語という第一外国語を効果的に習得する事に遅れを取ってきた。その上我国の地理的状況により、間接的な接触で異文化を受容してきた。我々の価値観との摩擦を小さくする方向で異文化要素を変化させ、情報の元々のコンテキストから切り離して社会に定着させてきた。しかし直接異文化コミュニケーションが避けられない21世紀で英語を媒介としていかに進めていくか。本校が誇る通訳プログラムを導入した英語教育を披露して考察した。　（文学部教授：通訳）

【第２回：2006年10月28日】……川村暁雄

●「人はなぜ人権を発明したのか

…女性の権利が必要なわけ」

10月28日に宝塚市立男女共同参画センター・エルにおいて開催された学外講演会で、「人はなぜ人権を発明したのか…女性の権利が必要なわけ」というテーマで講演を行いました。人権という概念は、みんな知っているつもりになっていますが、実はその役割は十分に理解されていません。今回は女性の権利を中心に、どのような人権が存在しているのか、それがなぜ必要なのかなど、受講者と対話を行いながら話を進めました。

参加者数は多くはありませんでしたが、その分、活発な意見交換を行うことができ受講生のみなさまにも満足いただいたのではないかと思います。

（文学部助教授：国際関係論）

学生たちに伝えたいことの一つ

米　田　眞　澄

私は担当するすべての授業（法律関連の授業）で、必ず「女性に対する暴力」について取り上げている。それは、女性ばかりの学生のなかで、この問題に無縁な人はいないと思っているからだ。多くの学生が熱心に話を聞き、自由にかつ積極的に質問をしてくる。私は本学に来て２年になろうとしているが、授業で出会う学生の多くが授業に積極的であることをうれしく思っている。

女性に対する暴力が人権侵害として認識されてきたのは、「人権」という概念が社会で認知され、法制度によって保障されていく歴史のなかではほんの最近のことであると話すと学生は一応に驚く。たとえば、日本で「セクハラ」が流行語大賞となった1989年は、彼女たちが生まれて数年後のことである。民間グループによる調査や裁判闘争を経て、事業主に雇用におけるセクシュアル・ハラスメントを防止するための職場配慮義務規定が男女雇用機会均等法に盛り込まれたのは、1997年の改正時である（昨年、再改正）。

学生の多くは1984年から87生まれである。彼女たちが生まれた頃、まだ日本には「セクハラ」という言葉も一般には伝わっていなかった。DVは、もっと後である。DVという言葉が日本で広まるのは21世紀になってからである。

彼女たちにぜひ伝えたいのは、「セクハラやDVの被害にあっても自分を責めなくていい」ことである。暴力は２人の関係性のなかで優位に立っている側が選んで行う行為だからである。相手を「屈服させることができる」と確信しているから、暴力という手段を選択する。セクハラやDVは、「つい魔が差して」あるいは「かっとなって」行われるものでは、けっしてない。また、「逃げられなかった」、「断れなかった」ことで自分を責める必要もない。逃げられない、断れない関係であることを知っているからこそ、相手は暴力を振るってくる。信頼できる誰かに相談しよう。きっとサポートしてくれる。もちろん、法的な手段に訴えることだって私たちにはできる。それを言うと学生は、にこっとする。　（文学部助教授：国際法学）

Life is Opportunity!

Margaret Kim

In the movie Tin Cup (1996), one of the main characters tells a riddle about a father and son being in a car accident. When the son gets taken to the hospital and put in the operating room, the surgeon takes one look at him, steps back and says, "I can't operate on this boy. This is my son!" The character in the movie asks how that could be possible if the father was also in the accident. It seems silly, but just 10 years ago, people had difficulty answering this question because the idea of a woman (the boy's mother) being a surgeon was hard to fathom.

In 1950, futurologists could see men working on the moon but not think of their wives working outside of the home. They believed this despite the fact that the first man-made satellite wasn't even sent into space until 1959 (Sputnik). It is hard to believe how much things have changed in only 50 years.

Thinking back to the time of my grandmother, when she was young, women were not expected to go to college, but rather to marry, and then take care of their families. When my mother was 18, it was acceptable for women to go to college, but rarely were they expected to work upon graduation. Because there were few opportunities for them, they often married and started families. As for my generation, it was natural that women went to college and furthermore, there were a number of professional opportunities awaiting them upon graduation (lucky me!).

For the current generation, things are even better. Women are not only expected to go to college, but upon graduation, the opportunities awaiting them are far more numerous than they were in my day (which wasn't THAT long ago...). From my perspective, I can see how opportunities for women have improved with every generation.

Women of previous generations dreamt for the opportunities that are now readily available. As today's women naturally pursue their passions and become surgeons, engineers, lawyers, or professionals in any other field that interests them, the riddle that I began this article with becomes more and more, a remnant of a bygone era. As a final message to young women of today, remember that life is filled with opportunity: take advantage of it!

（文学部専任講師：英語）

2006年度後期活動報告

Ⅰ　講演会・セミナー等

［前期開講分については前号を参照のこと］

学外講演会

会場：宝塚市立男女共同参画センター・エル

＜第１回＞　2006年10月７日（土）

「異文化コミュニケーションに於ける英語の役割」

講師：松縄順子氏

（神戸女学院大学文学部教授：通訳）

＜第２回＞　2006年10月28日（土）

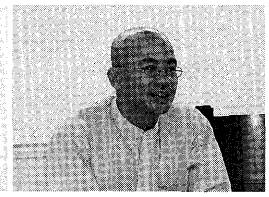
「人はなぜ人権を発明したのか

…女性の権利が必要なわけ」

講師：川村暁雄氏

（神戸女学院大学文学部助教授：国際関係論）

松縄順子氏



川村暁雄氏

Ⅱ　研究助成

「父権思想から母権思想へ：第１次大戦をめぐる詩、短篇、その他の文学とヨーロッパ思想」

平井雅子［文学部教授］

「画像史料の収集と教材開発」

真栄平房昭［文学部教授］

「マフィアとジェンダー

―パレルモの反マフィア運動の視座から―」

高橋友子［文学部教授］

"Women at the Fringe of Japanese Society: A Documentation and Oral History of Migrant Women (and Men), Families and Children"

津田ヨランダ［文学部助教授］

「フィリピンのキリスト教系女子大学を中心としたジェンダー研究と教育カリキュラムの現状」

横田恵子［文学部助教授］

Ⅲ　学会等出張補助（国内・海外）

2006年度は申請なし。

Ⅳ　授業（科目名：Cu134(1)(2)「女性学（実践編）」
Cu234(1)(2)「女性学（理論編）」）

Cu134(1)(2)「女性学（実践編）」、Cu234(1)(2)「女性学（理論編）」［主題コース］として前期後期とも本学にて開講した。

Ⅴ　学生懸賞論文（「女性学インスティチュート賞」）

2006年度（第８回）は10編の応募があり、選考結果は以下の通り。

＜最優秀賞＞：賞金５万円（賞状）
淵上愛子氏（神戸女学院大学人間科学部
2006年３月卒）

＜優秀賞＞：賞金２万円（賞状）
大角尚子氏（神戸女学院大学人間科学部
2006年３月卒）

表彰は2006年10月13日神戸女学院講堂において学院の各種記念授与式とあわせて行なわれた。

Ⅵ　出版物

『女性学評論』第21号
特集：「ジェンダー」再考　（2007年３月発行）
「ニュースレター」No.41　（2006年10月発行）
「ニュースレター」No.42　（2007年３月発行）

― 2007年度（第９回）学生懸賞論文募集 ―

賞の名称は「女性学インスティチュート賞」。対象は本学学生（学部生・大学院生）及び2006年度の本学卒業生・修了生が執筆した女性学、ジェンダー・スタディーズに関連する領域の論文。最優秀賞論文（１編）には賞金５万円及び賞状、優秀賞論文（２編）には各２万円の賞金及び賞状が授与される。また最優秀賞論文については『女性学評論』第22号（2008年３月発行予定）に全文が掲載される。締切は2007年７月23日（月）。選考結果の発表及び表彰は2007年10月中旬の予定。詳細は当インスティチュートまで。

― 2007年度前期講演会等のご案内 ―

■特別講演会

日時：2007年６月15日（金）　10:35～11:25
会場：神戸女学院講堂
講師：北條ゆかり氏（滋賀大学経済学部助教授）
演題：「移民の女性化にみられるジェンダー・ダイナミクス」
≪申し込み：不要、受講無料≫

■連続セミナー「移民・女性・グローバリゼーション」

日程：2007年６月15日～７月６日、
14：00～15：30（全４回）
会場：神戸女学院大学JD-104教室

〈第１回〉　2007年６月15日（金）
「私たちの服は誰が作っている？
グローバルな分業とアジアの女性」
講師：川村暁雄氏（神戸女学院大学文学部助教授）

〈第２回〉　2007年６月22日（金）
「人身売買受入大国ニッポンの責任と課題
― 微笑みの国の女性たちの経験」
講師：米田眞澄氏（神戸女学院大学文学部助教授）

〈第３回〉　2007年６月29日（金）
「滞日アジア女性の困難：
医療・子育て・人間関係をめぐって」
講師：横田恵子氏（神戸女学院大学文学部助教授）

〈第４回〉　2007年７月６日（金）
「『排除』か『同化』か？ フランスとイタリアの事例から」
講師：高橋友子氏（神戸女学院大学文学部教授）

定員：40名　＊３回以上の出席者には修了証を発行
≪申し込み：要、受講無料≫

女性学インスティチュート
インターディシプリナリー・プログラム

「女性学インスティチュート　インターディシプリナリー・プログラム」は、学生における「女性学、ジェンダー・スタディーズ」の認識を高めることを目的とし、本学で開講される科目のうち、女性学やジェンダーの視点を取りいれたものを在学期間中に「女性学（理論編）」、「女性学（実践編）」を含む10単位以上を取得した学生に、「プログラム」修了証を交付する制度です。

修了証を希望する学生は、必要単位の履修を証する書類（成績表等）を女性学インスティチュートに提出しますと、学期末に修了証が授与されます。なお、各年度において該当する科目は、年度初めに告知します。

2006年度女性学インスティチュート編集委員
三浦欽也、溝口 薫、高橋友子（委員長）、渡部 充、山本義和（ABC順）　編集事務：溝口芳子

編集・発行：神戸女学院大学女性学インスティチュート
〒662-8505 西宮市岡田山4-1 TEL/FAX:(0798)51-8545
URL http://www.kobe-c.ac.jp/gender/